

# フランス革命解釈と 現代思想をめぐって

寺田元一

## はじめに

一九八九年は、日本の政治と政治をめぐる文化状況を象徴するような事件を刻み込んで過ぎていく。昭和天皇の死・大喪、新天皇の即位、昭和から平成へ、消費税導入、リクルート事件による竹下内閣の倒壊……。われわれがフランス革命二百周年を祝うのはこうした地盤においてである。祝福さるべき革命は、共和国の実現、共和暦の制定、免税特権の廃止などを実現した。この対照！しかし、われわれがフランス革命の意味をあらためて問い直すのは、どちらが参照枠になるにせよ、両者が己を対照し合うこの空間でなのだ。

さて、歴史研究は資料の発掘や学会の動向にも影響されるが、現代の政治・思想の潮流や研究者の政治・思想的立場に影響される。フランス革命研究の場合、対象が対象であるだけにそれはいっそう顕著である。であるがゆえに、フランス革命研究者による研究動向の紹介とは多少とも別の観点から、私のような思想史研究者が現代思想との関連で最近の革命解釈の特徴を検討するのも無駄ではなからう。ただし、本稿は単なる中間的な報告にすぎない。革命研究の動向についても、現代の政治・思想状況についても、両者の連関付けについても、筆者のフォローはほんの一部分にのみ及んでいるだけであり、すべて後に必要な補完を行って一応のまとめをつけていかなければならない。

本稿の前半部では、フランス革命の最近の研究動向について、仄聞した範囲内において検討を加える。後半部では、フランソワ・フェレ『フランス革命を考える』とリン・ハント『フランス革命の政治文化』の二研究を取り上げて、細部に互る分析を行う。数ある研究書の中からこの二著を選んだのは、どちらも新しい革命史研究の方向を示すものとして、評判が高いからである。ミシェル・ヴォヴェルとモナ・オズーフも扱う予定であったが、準備不足で割愛した。

## 一 最近の研究動向と思想状況

まず、フランスを中心とする欧米の近年の研究史からみていくことにしよう。

フランスは現代思想の主要な震源地の位置を保ち続けている。レヴィ＝ストロース、フーコー、アルチュセール、デリダ、ドゥルーズ、ガタリ、リオタール、ブルデュー、レヴィナス……次々と紹介される思想家群。歴史学関係では、「長期的持続」を対象とするアナル派の仕事。そうした活動を通じてポストモダンの思潮が力を強めつつあるようで、それに批判的なフィンケルクロートの『思考の敗北あるいは文化のパラドクス』が二年前にベストセラーになってもいる。実存主義、マルクス主義、サルトル、フランス的合理主義が優位を占めた時代から構造主義、ポスト構造主義、ポストモダンへと状況は変化しつつある。フランス革命史研究の動向もこうした変化と無縁ではない。<sup>(1)</sup>

フランスではオラール、マティエ以来の「ジャコバン＝マルクス主義」的解釈が一九六〇年代まで主流を占めてきた。その特徴は、大体のところ、封建的なアンシャン・レジームの桎梏をブルジョワジーを中心とする第三身分の民衆が打破し、資本主義的な生産関係と民主主義的な政治体制を樹立して近代社会の礎を置いたものとして、フランス革命を解釈する点に求められる。そこから、とりわけ、ジャコバン独裁の時期が重視される。こうした解釈に対して、フュレとリシェは La Révolution française, Paris, 1965で次のような解釈を対置した。すなわち、革命は、貴族と上層ブルジョワからなるアンシャン・レジーム内部のエリート層の主導権争いを王権が調停できなかったことから生じ一七九一年までに決着がついた、しかし、そこにたまたま民衆の反乱が介入してきたために、革命は「スリップ」し本来の方向から逸脱してしまった、だが、その混乱が収まると自由主義的エリート支配というあるべき方向に落ち着いた、というものである。ここには、「長期的持続」において近代化の事態を把握して、革命の初期とナポレオン体制とを連続的に捉え、ジャコバン独裁はその軌跡からの逸脱とみなす発想がある。その意味で、この「修正主義的」解釈は、トックヴィル流の自由主義的立場からの近代化論にアナル派的手法を接合させたものとみることができる。革命の主要時期の変化を偶然としか捉えることができないところに、構造主義的傾向を読みとることができる。

両者の論争と並行して、七十年代になると、アナール派の内部ではフランス革命解釈と関わって変化や事件に注目する傾向が生まれ、政治史＝事件史への関心が強まるようになる。しかも、それを「心性 *mentalité*」や「社会結合 *sociabilité*」の変化という視角から考察する方向を取ることによって、革命祭典やイメージ、象徴といった文化的事象に関心が集まることになる。事件は、方法論的には、歴史の単一の時間性を否定し、歴史に持続を異にする「さまざまな時間」があることを認めた上で、その交錯として把握される。その点で、同一化の運動を拒否して「差異化」を前面に出すポスト構造主義の傾向と通じる。こうした研究動向を代表するのが、モナ・オズーフであり、M・ヴォヴェルである。<sup>(2)</sup>他方、フュレは、のちに詳述する『フランス革命を考える』（一九七八年）で先の見解を修正し、歴史に進歩の方向を定め革命をその起源とする解釈を「起源の物語」として拒否し、「フランス革命は終わっている」と宣言する。また、「スリップ」概念を放棄し、同じ現象（ジャコバン独裁）を、一般意志と個別意志・民衆と個人の一致を説く革命の言説が支配的になり、その言説の運動が「民衆」との同一化を求めて「敵」をたえず創出することから生じたと説明し直す。したがって、一九七八年のフュレにあっては近代化論的主張や「長期的持続」の視点は弱まり、形而上学的な革命言説を支配や排除を生み出すものとみ、近代の「大きな物語」（リオタール）を否定して流動的な力関係の変動に着目しようとする点で、ポスト構造主義やポストモダンの傾向が強まっている。

八十年代になると、フュレの影響を受けながらも、革命期の政治力学の展開を彼のように哲学的抽象的な論理によって説明するのに満足せず、アナール派の諸概念を導入しオズーフやヴォヴェルの成果も継承しながら、フランス革命を「新しい政治文化の創造」と捉える解釈が登場する。後述するL・ハントなどがその代表者である。彼らは、革命政治を、議会レベルに限定して捉えるのではなく、旧来の文化（生活様式、人間関係）全体の変革にまで関わる公私貫通的なものとして捉え、宗教・象徴・言語・服装など日常生活レベルの改変と関係づける。それゆえ、政治は文化なのである。こうして、政治的視角からではあるが、「心性」や「社会結合」の変化も扱われることになるわけである。<sup>(3)</sup>

こうして、今や、政治思想状況の変化と関わりながら、「ジャコバン＝マルクス主義」派、「修正主義」派、「政治文化」派、「革命心性史」派などが鼎立し、

批判と影響を与え合うというのが、フランスを中心とする欧米の革命研究の大まかな現状となっている。

資料として、まず、フランス国立科学研究センターが世界各地の革命二百周年記念研究会のプログラムやその準備状況を紹介するために一九八三年十一月よりはば年に一回のペースで刊行している 1789-1989 bicentenaire de la révolution française を取り上げてみよう。それをみると、予定テーマとして心性や社会結合の変化を扱ったものが目立つ。「政治的社会結合」「アンシアン・レジームの社会結合から革命的社會結合へ」「革命の象徴とイメージ」……。モンペリエ大学のグループは「心性史」を中心テーマの一つに設定し、「社会結合の枠組、アカデミーから民衆社会へ」「革命祭典」「概念の生と死：アンシアン・レジーム、貴族、愛国者、市民、国民、自由、友愛、平等、最高存在」「宗教、宗教性、宗教性の置き換え」などをサブテーマとしている。「政治文化」も多くの研究会で取り上げられている。

従来フランス革命史をリードしてきたマルクス主義の研究者の側もこうした動向に啓発されている。さきほど心性史の担い手として名前を挙げたヴォヴェルは、ソブール亡き後ソルボンヌのフランス革命史講座を襲った。その意味で、オラーからソブールに到る「ジャコバン＝マルクス主義」の継承者なのである。その彼が一方で「心性史」派を代表してもいるわけである。また、正統派マルクス主義者と見なされてきたマゾリックも、アナール派やネオ・マルクス主義の影響を受けて、「象徴システムや言語など、文化の次元で起こった変化に注意をうながし」、フランス革命を「文化的構造の変革をもともなう特殊フランス的なブルジョワ革命」とみるようになっていく。<sup>(4)</sup> こうしたことから、マゾリックが中心になっているマルクス主義研究所のプロジェクトのテーマにも、「カール・マルクスとフランス革命」「フランス革命と封建主義から資本主義への移行の（地域的、国民的）諸道程」といったテーマに伍して「革命的変異の規模・次元（経済、社会、文化、政治）の広大さと多元性」が挙げられることになる。

「修正主義」派の著作としては、Jacques Solé, La Révolution en questions, Le Seuil, 1988 が話題を呼んだ。『革命問題集』とも訳せるこの本は、「正統」派と自派の対立点を後者の側から問題の形で体系的に整理し直し、「正統」派の論拠を攻撃して自派を擁護するポレミカルな構成を取っている。ブルジョワジ

概念の曖昧さをつき、貴族とブルジョワジーとの階級闘争を革命の原因とする議論をたたき、テルールを状況のせいにする弁証論を否定し、革命の変革的意義を弱めるようなところに、「修正主義」派の面目が躍如している。また、イギリスではT. C. W. Blanning, The French Revolution: aristocrats versus bourgeois?, Macmillan Education, 1987 などがある。(5)

また、八六年から八八年にかけ展開された国際的な大コロキウム「フランス革命と近代政治文化の創造」についても、言及しておかなければならない。このコロキウムではアンシアン・レジーム、革命、革命後の政治文化が年を追って種々の角度から照射された。筆者は未見であるが、その報告集としてThe French Revolution and the Creation of Modern Political Cultureが刊行されつつある。第一巻はThe Political Culture of the Old Regime, Ed. by K. M. Baker, Pergamon, 1987として既に公刊されている。これを、「政治文化」派の国際的な旗揚げと見なしても間違いではあるまい。

こうした研究の広がりにつれて、従来見過ごされてきたような史料にも照明が当てられ、その発掘や整理も広範囲に亘って盛んになされていることが、国立科学研究センターの同じ雑誌から看取される。その代表例が、ヴォヴェルのLa Révolution Française: images et récits 1789-1799, Livre club Diderot Messidor, 1986-1988, 5 tomes である。この四折版の大部の著作には革命期に現われた図像など種々のイメージが満載されている。将来フランス革命文化を論じる際に必ず依拠すべき基本テキストもしくは資料を提供することになることは間違いない。また、七月六日からパリで開かれるヴォヴェル主宰の大シンポジウムのテーマは「フランス革命のイメージ」であるが、この五巻本はそのための資料的土台ともなっている。(6)

ここで、日本に眼を転じてみよう。日本のフランス革命史研究は、敗戦後の日本の民主化・近代化というプロブレマティックに沿って展開され、大塚史学に依拠し近代化の主体を革命のなかから析出しようとする高橋幸八郎の『市民革命の構造』（一九五〇年）や、フランス革命を近代国家への構造転換を行った民主主義革命とみる京大人文研グループによる共同研究、桑原武夫編『フランス革命の研究』（一九五九年）などの業績を生んできた。また、同様のプロブレマティックからマティエ、ソブール、リュージェなどの諸著作も翻訳された。その意味で、

日本ではフランス革命はマルクス主義・近代主義の枠組に即して検討されてきたといえる。この傾向は日本の思想状況に即応するものであっただけでなく、フランスなどにおける研究動向とも相覆い合うものであった。

しかし、高度成長以後、日本の政治・思想状況が変わる。欧米は追いつき追い越すべき目標ではなくなる。ジャパン・アズ・ナンバーワンのかげ声のもと経済的先進国としての現在の位置を守りつつ、それにふさわしいナショナリズムを宣揚することが課題として提起されてくる。新保守主義・生活保守主義が近代主義にとって代わり、市民主義は、日本も市民社会になったとして現状肯定に向かう方向と、エコロジズムと結びついてラジカルな社会批判に向かう方向に分裂する。マルクス主義にも同様の亀裂が入る。<sup>(7)</sup>全体の傾向は保守的なものに代わり、近代の主要な価値（民主主義、合理主義、科学技術、禁欲的勤勉など）が疑われはじめ、一方で、日本的経営や日本的伝統が賞賛され、他方で、ポストモダンな方向－知の不確実性・リゾーム性、価値の多様性の承認、演劇的で愉快な知の空間を跳ね回るスキゾキッズ－がめざされる。こうして、欧米をみる眼も変わる。欧米は、互いの人権を尊重し合う近代的個人が織りなす発達した市民社会ではもはやない。伝統的なものが生き続ける、伝統と調和した社会となる。その代表が、いうまでもなく、パリである。

こうした思想状況において、フランス革命は、敗戦直後のように民主主義的再生への情熱をかき立ててくれるものではなくなる。それは相変わらず「大きな物語」ではあるが、池田理代子の『ベルサイユのばら』やダヴィッドの『球戯場の誓い』に表現されたようなロマンチックな激動の舞台に模様替えしている。こうして、フランス革命は一面で旅行好きのグルメの消費対象となる。革命記念番組は観光・グルメ案内となり、二百周年は便乗商法の格好の餌となる。<sup>(8)</sup>二百周年記念のシンボルである「三羽の鳥」がリクルートのカモメにみえてくる。

こうした状況に直面して日本のフランス革命研究者は、自己の研究の意味を問い直すことを余儀なくされる。従来、近代の定礎としてこの革命を高く位置づける伝統が続いてきただけになおさらである。研究の主流をなすフランスを中心とする欧米の研究自体が、自国のポストモダンの状況と無縁ではないだけに、それに敏感に反応しつつも、いかなる研究をいかなる方向で生かすかが、個々の研究者にたえず問われてくる。革命研究者ではない筆者は日本の学会の動向を身近に

フォローできる位置にはいないが、以下、筆者の管見仄聞した範囲で我国の革命史研究の現代的特徴と思われるものに言及したい。

戦後の研究を担った五十代後半以上の世代の場合、一般に革命の近代性を擁護する傾向が強い。したがって、フュレのように、フランス革命の終焉をポレミカルに唱える「修正主義」派に対して批判的である。例えば、『学燈』に八八年一月以来毎号掲載されている「フランス革命二百周年」記念の小論考の寄稿者のうち、河野健二や遅塚忠躬は、こうした傾向に対峙する論陣を張っている。<sup>(9)</sup>遅塚が同じ論考で、日本文化の優越性を説く平川祐弘の新保守主義的な見解に異を唱えているのは偶然ではない。この言説は、生活保守主義やポストモダンの蔓延跋扈を慨嘆する中野好之の論考「「革命」の今昔」と重なる。「社会的な革命への内面的共感を哺む土壌」が急速に掘り崩されている現状への中野の苛立ちと「私は自分が世に取り残された口惜しまぎれに改めて気を取り直してフランス革命の時代と取り組み、今日の我が国のどう見ても自堕落としか言い様のない知的状況に、なんとか革命の時代への情熱を今一度呼び戻す機会を作り出すことを夢見た」という決意は、程度の差はあれ、この世代の革命史研究者の多くに共通する感慨なのではないだろうか。<sup>(10)</sup>自由民権との関係で革命を論じる論者にも同じ苦澁があるに違いない。

四十前後の比較的若手の研究者の場合、フランス革命へのこのような深い「思い入れ」はない。彼らは革命から距離を取り、特異な興味深い社会事象としてそれに対峙しているようである。現代日本の政治思想状況と関わらせて彼らの業績を分析する用意はないが、一世代前の研究者と比べ、より自由に欧米の新動向を吸収し、新しい観点からフランス革命の見直しを行っていかうという姿勢は、明らかにみてとれる。以下、その一端を紹介する。

「心性史」からのアプローチに立川孝一『フランス革命と祭り』（筑摩書房、一九八八年）がある。ヴォヴェルの下で学びオズーフに私淑する立川は、この著書で、フランス革命＝ブルジョア革命という革命の断絶の見方に対して、革命とフォークロア（伝統）との連続性を、プロヴァンスにおける「自由の木」の植樹や「祭り」などを通じて考察する。彼は、政治史・経済史をまず押さえ、その上に「心性史」をのせるというやり方ではなく、祭りのサンボリズムから現実の歴史に切り込むという方法をとる。革命の展開に即して祭りのシンボルがいかに変

化したか、変化したシンボルを通じて伝統的な表象がいかに再生するか、それは「心性」のいかなる連続もしくは変化を示すかなどを、プロヴァンスの革命祭典を年代ごとに追いつつ検討している。

フランスの研究動向を反映して、祭典と関わるが、革命時の絵や諷刺画、シンボルなど図像にも関心が集まっている。多木浩二『絵で見るフランス革命－イメージの政治学－』（岩波新書、一九八九年）と芝生瑞和編『図説 フランス革命』（河出書房新社、一九八九年）が、ほんの数日前に相次いで出版された。どちらの著作についても十分検討する時間的余裕がなかった。簡単にその特徴を述べよう。豊富な図版を配列しそれに本文の説明が加わるという体裁は共通している。しかし、前者が芸術学・記号論の専門家によるもので、イメージが革命の政治言語としていかに機能したか、また、政治的社会的伝達の回路をいかに形成したかを扱うのに対し、後者は、国際ジャーナリスト・政治家の編集になるもので、現代の国際情勢とも関わらせながら、「正統」派的視点から骨太にフランス革命史を語っている。前者では図像は本文が解説すべきテキストであり、後者では本文の理解を助ける資料となっている。いずれにせよ、ヴォヴェルの既述の大部の史料集がどちらの場合も利用されており、フランス革命が日常生活レベルの文化革命でもあったことが、どちらについてもよくわかる。

フェレ『フランス革命を考える』の邦訳者大津真作は「大革命下の啓蒙思想－『両インド史』のレーナル師の場合－」を書き、啓蒙期においてあれほど危険視されたレーナル師が、革命の混乱を通じて王政の再建を唱える君主主義者に成り下がり、他方で、ロベスピエールが百科全書派を弾劾するという事実を挙げて、啓蒙主義の政治観と革命の力学との断絶を明らかにしている。この論攷は「直接民主主義の専制」（ジャコバン独裁）を擁護してきた日本の左翼の革命解釈を批判し、ソレに倣って「大革命史の白紙還元的考察」<sup>(11)</sup>を行おうとするもので、「修正主義」派に近いスタンスを取っている。ただし、「修正主義」で大津が解釈を一貫させているというより、反「正統」派の方向で「修正主義」派の議論を利用しているというのが、真相であろうが。

文学関係でもフランス革命に対し独特のアプローチをする研究者が出てきている。例えば、日本フランス語フランス文学会の今年度の大会のシンポジウムは「フランス革命と文学」をテーマに行われたが、提題者のうち鷺見洋一、植田祐次、

水林章には、類似の方法論が見受けられた。すなわち、アナル派の社会史や心性史の影響の下、革命による文化、心性や社会結合の変容を問題にした上で、それに応じたエクリチュールの場や運動の変化を考察するというものである。フランス革命に即していえば、社団ごとに差異化された閉鎖的な小集団社会が、革命によって、均質な匿名性の大きな社会に変容し、それに応じて、エクリチュールも書簡体から匿名の読者向けのものへと変化するのである。また、変化を生み出す革命の「事件」と、その影響を押し止めたり、歪めたり、推進したりするエクリチュールの運動との関係にも、関心が持たれている。

#### 注

- (1) ポストモダンについては、本報告集所載の池田論文において詳細に検討されているので、そちらを参照のこと。
- (2) モナ・オズーフ『革命祭典－フランス革命における祭りと祭典行列』立川孝一訳、岩波書店、一九八八年、M.Vovelle, La Mentalité révolutionnaire, Paris, 1985や同じ著者の「フランス革命における心性の変化」立川孝一訳、『思想』七六九号（一九八八年七月）、四－二七頁などを参照。
- (3) 以上の叙述に当たっては、主として、松浦義弘「フランス革命の復権にむけて－「アナル派」をめぐる新しい政治史－」『思想』七六九号（一九八九年七月）、岩波書店、二八－五四頁、を参照した。
- (4) 同上、三八－三九頁。
- (5) この段落の記述は、第二回フランス社会経済思想史研究会（一九八八年十一月二六日）における山崎耕一報告「最近のフランス革命史研究をめぐって」に依った。
- (6) なお、フランスを中心とする欧米のより包括的な研究状況については、ヴォヴェル「フランス革命史研究の現状－革命200周年を前にして－」遅塚忠躬訳、『土地制度史学』第117号（一九八七年十月）、五八－六九頁、参照。これは、一九八七年四月の来日時にヴォヴェルが東京と京都で行った講演の邦訳であり、従来支配的だった「ジャコバン派」（マルクス主義）史学に対抗してアナル派の影響を受けた「修正主義派」（後述）が現れ、

両者の論争を軸に、新しい社会状況のなか、「政治史」「伝記的研究」「社会史」「農村史」「文化史」「心性史」の分野で革命史研究が再び活況を呈し始めたことが述べられている。

- (7) 石井伸夫他著『モダニズムとポストモダニズム－戦後マルクス主義思想の軌跡－』青木書店、一九八八年所収の後藤道夫論文「階級と市民の現在」参照。この論文で後藤は、日本におけるサンジカリズムの伝統の欠如を嘆き、労働者文化の形成を強く訴えているが、これは、労働者の階級的「心性」・「社会結合」の形成を通じた階級的「政治文化」の創出の問題とパラフレーズできる。このように、これらのカテゴリーは、フランス革命分析のための概念であるだけでなく、現代社会を分析する視角をも与える。協同組合やアソシアション、ネットワーク運動の見直しなども同じような視角からなされている。フランス革命はやはり過ぎ去った対象ではない。現代とトータルに関わる研究対象であり、現代の分析視角をも与えるものなのである。
- (8) 朝日新聞五月二二日付「古きを訪ね今を活性化、百貨店では便乗フェア」、六月二六日付「日本の商魂、ちゃっかり便乗、特別ツアーや「公式グッズ」テレカにコインにパーティーも」を参照。二百年祭の日本実行委員会の委員長に黒川紀章がなり、堤清二、佐治敬三、盛田昭夫などの大資本家が委員に顔を連ねるのも宜なるかなである。
- (9) 西川長夫にも同様の反応がみられる。彼は、注(6)のヴォヴェルの講演を批評して、「修正主義派」の背後にいるアナール派こそが問題であり、彼らの概念を多用するヴォヴェルに不満をもらし、「世界的な視野のなかで大革命の意味をとらえなおし、その現代的な意義を問うという観点」が欠如していることを嘆いている（「国家とナショナリズムをめぐる三つの断章－フランス大革命の消滅－(1)」『歴史学研究』第五六九号、三五－三六頁）
- (10) 『学燈』第八五巻第七号（一九八八年七月）、四四、四七頁。
- (11) 唯物論研究協会編集『思想と現代』第十六号（一九八八年）、五一頁。

## 二 フュレの「修正主義」とハントの「政治文化」

### 第一節 フランソワ・フュレ『フランス革命を考える』

この本の第一部は「フランス革命は終わっている」と題されている。このポレミカルな題名は、従来歴史学の対象となってきた「フランス革命」が、実は現実の歴史とは無縁のものであり、ある種の物語的知のなかにしか存在せず、その物語が幻想にすぎない以上、「フランス革命」もまた雲散霧消してしまったということの意味している。その物語は、「ポリシェビキはジャコバン派を先祖とし、ジャコバン派は共産主義の予想図をもった」<sup>(1)</sup>という工合に、起源と目的との共犯関係によって成立する「起源の物語」「アイデンティティーの言説」<sup>(2)</sup>のことである。問題になっているのが、「ジャコバン＝マルクス主義」的革命観であることはいうまでもない。

さて、そこでフュレは、革命現象を「起源の物語」に収容不能なものとして提示する。すなわち、「長期的持続」において因果のカテゴリーによって説明可能な歴史過程と、集団行動に独特の力学としての革命現象を峻別するのである。その上で、以前のように、革命現象を「スリップ」とはせず、新たな政治文化の登場とその言説の固有の運動によるものと考え、このルソー主義的文化は、先行状態の因果的帰結としては説明不能であり、アンシアン・レジーム末期に生じた国家権力の真空状態において「本性を異にした複数の系列の事件が交錯するなかで」<sup>(3)</sup>新規に成立したとされる。この革命文化は「不一致の正統性と代表性の正統性をともに排除」<sup>(4)</sup>し、個別意志と一般意志、個人と民衆との透明な関係を作り出そうとする。こうして、だれもが「民衆」の名において語ることになり、その言説によって、絶対権力の根拠であり本来的に一なるものである「民衆の意志」を、互いに篡奪し合うことになる。権力をめぐりこうした言論実践の総和がフランス革命である。しかし、こうした言論は、「権力の不可避の墮落を糾弾しながら、同時に権力なるものをめざ」すというパラドクスを内包している。<sup>(5)</sup>そこから、革命家に、民衆を代表する議員と、民衆として議員の行動の世論（一般意志）からのズレをチェックするクラブ活動家という分担が生じ、両者の闘争としてフランス革命は推移することになる。これを階級対立と見るのは誤りであり、ジャ

コバン独裁は大革命の言説を独占した一結社の言論独裁と規定される。普遍性を独占した側からすれば、異なる言説は特殊意志の表現であり、陰謀と特徴付けられる。これに陰謀の道具的利用も加わって、テルールが現出することになる。ロベスピエールがそうしたルソー主義的言説のチャンピオンであり「語ることを全部を大革命の用語で表現」<sup>(6)</sup>している。「人民主権を国民公会主権……と同一視」<sup>(7)</sup>する点で、ロベスピエールはルソーと異なる。その現実の乖離を、彼は神話・宗教・テロによって和解させようとする。それゆえ、状況のためやむをえなかったとして「状況説」でテルールを弁護することはできない。それは革命の言説の必然的帰結なのである。

したがって、テルミドールは「政治の幻想にたいする現実社会の報復」<sup>(8)</sup>と規定される。テルミドール派は革命言説を捨て別の言説を語り始める。普遍性・正統性を主張することをやめ、現実の特殊利害の存在を認めてコンセンサスを追求し始める。こうして、権力と民衆との同質性と透明性の言説の時代が終わり、両者の分裂が認められ、社会は独立性を回復し、政治的言説は合法性とコンセンサス（利害調整）で満足する時代となる。これは、「もうひとつの大革命」＝「諸利害の大革命」<sup>(9)</sup>である。最後に、ナポレオンによる革命の終結、絶対主義的伝統との和解、歴史過程の連続性の回復が語られる。

つぎに、第二部で「三つの可能なフランス革命史」と題してマルクス主義の革命史、トックヴィル、コシヤンの革命史が批判的に検討されているが、ここでは省略する。

さて、このフュレの新たな解釈をどう評価すべきであろうか。リシェとの共著で彼は、アナール派的近代化論者として一貫した革命解釈を行っていた。革命はなくてもよかった偶然的逸脱現象であり、歴史の大道はあくまで自由主義的近代化にあった。したがって、歴史の主流と革命という偶然事とは概念上の価値を異にしていた。近代化が中心に位置し、革命は周縁的なものにすぎない。この視角から彼は、フランス革命を統一的に把握していた。ただし、フランス革命論でありながら、革命の基本現象を「スリップ」としてしか説明できないところに、致命的弱点を持っていたが。フュレはその点を自覚し、『フランス革命を考える』では、革命現象が固有の論理に即して展開されたことの説明に心血を注いでいる。しかし、その結果、解釈に大きな分裂が生じてしまった。

そこでは二元論が大きく口をあけている。歴史過程対革命現象、現実社会対革命政治、状況の規定性対言説の自立的運動という工合である。フュレはこれらの背反的対立項を対象に応じて使い分ける。近代化という歴史の長期過程が問題となる場面では前者を、革命が問題となる場面では後者をとという風に。その結果、革命現象は、現実社会や状況とのつながりを無視して、非常に観念論的に解釈されることになる。実際、その点の叙述は歴史というよりルソー的イデオロギーの批判である。現実社会はテルミドールにおいてやっと政治に報復するが、そのときまで現実社会が政治に関わらないことが果して可能であろうか。公私の透明性を求める言説は、ある種の共同体におけるように、場合によっては平和裡に一体化を実現できるのであり、この言説の運動のみからなぜ権力闘争があれほど熾烈に行われたかを説明することはできない。「貴族の陰謀」が「民衆」の対立項になるのもその土台にやはり現実の利害対立があるからである。こうした諸点についてはマルクス主義の解釈の方がはるかに説得的である。<sup>(10)</sup>フュレの新解釈は、その観念論性において「スリップ」論の弱点を相変わらず引きずっている。ところで、フュレにおいて論理的に同等の資格で、言説の論理を長期の歴史過程に当てはめて言説の論理で一貫した歴史を構成することも可能なのではないだろうか。その際には、近代化論はどうなるのであろうか。

以上のように、この二元論的シェーマがフュレの解釈の一面性・抽象性を生み出している。その一方で、対立項の両面を安易に結合して「起源の神話」に乗っかってしまうような解釈に対する批判は鋭い。このように、単純さも恐れず論理で押しまくるところに、フュレの解釈の弱点も魅力もある。そこで、その弱点を克服するために、二元の両項をいかに的確に連結するかが、研究者に課せられたテーマとなる。すなわち、長期的持続と短期的変動、心性史・社会史（あるいは経済史）と政治史の連関が問題となるのである。ここに、フュレからハントのような「政治文化」派が出てくる理由があるといえよう。

さて、知の技術化・工学化・情報化が進んで効率の追求が支配的になり、人類の<自由>、<解放>、<進歩>といった近代の「大きな物語」が失墜するところにポストモダン的な状況の特徴があるとすれば、フュレのフランス革命終焉論は、まさにこうした状況を映しとっている。自由・解放・進歩の大きな物語の一節として、フランス革命はどれほど大量の文書を生み出してきたであろうか。フ

ユレの議論は「イデオロギーの終焉」を唱えたダニエル・ベルに比肩される。周知のように、ベル流の近代化論の現状把握とポスト・モダンのそれは多くの点で共通する。ただし、こうした状況に対して「問いかけ」「脱正当化」「限りない多様化、差異そして異質性」といった知の戦略をもって対処する点にポスト・モダンの哲学の独自性があるが。<sup>(11)</sup>他方、形而上学によって抑圧、隠蔽、排除されてきた<差延>や<外部>の存在を明るみに出して形而上学批判を行い、抑圧のない非形而上学的な思考の可能性を追求する点に、ポスト構造主義の共通の特徴があるとすれば、革命の言説による特殊性・多様性・異質性の抑圧、排除をフユレが問題にする箇所に、こうした思潮とのつながりを看取できる。こうした点から、フユレの解釈をポストモダンあるいはポスト構造主義的とすることができる。

## 第二節 リン・ハント『フランス革命の政治文化』

「ここ十五年ないしは十年来、歴史学そのものが政治史＝事件史への傾斜を強めつつある」。<sup>(12)</sup>そうした研究動向の変化の一環としてフランス革命研究では「政治文化」に関心が集まっていることは、既に述べたとおりである。その代表者であるハントの表記の著書については、邦訳者である松浦が前掲論文で適切な紹介を行っている。それを参考にしながら、この本について簡略に紹介をしよう。

まず、ハントは、「序説」において、マルクス主義や「修正主義」の解釈とともに起源と結果をつなぐ歴史主義的なものとして批判し、フランス革命の成果が「新しい政治文化」の創造、すなわち、君主制を支えてきた儀式や象徴を除去し、新たな権力秩序の理念や諸原則を表現する象徴や儀式を創り出したことにあるとして、これを全体の議論の前提に据える。その際、政治の水準は別の水準の反映ではなく固有の論理にしたがうこと、他方で、政治文化は社会構造と相互作用を行うことを、方法論的に前提する。

その上で、第一章「フランス革命のレトリック」において、この政治文化の中核に政治的レトリックがあるとする。そして、このレトリックを下位の水準にある本質（例えば、経済）のドキュメントとしてではなく、それ自体が固有の場で

あるテキストとみなす。政治とはこのレトリックに他ならない。そのテキストの統一した構造を作り出すのが、過去と断絶した新たな国民的共同体の創造という確信である。このように、ハントは最近の文芸批評の概念をも利用しながら政治文化を固有の対象として析出していく。さて、革命は過去のレトリックを否定して、国民共同体のレトリックを新たに創出していくわけであるが、それをめぐる対立から政治闘争が生じる。その結果、革命は、レトリックの説話的構造がコメディ→ロマンス→悲劇と変容する形で推移する。この推移の原因は、国民的共同体の再生への探究をたえず妨害する敵の陰謀にたいする強迫観念にある。こうして、自由主義的政治の可能性は否定され、テルールが上の確信の論理的帰結として生じる。これこそが、国民的共同体を求めつつそれをたえず掘り崩さざるをえないという、革命期のレトリックの矛盾である。他方で、それは過去の政治の限界を突破した。政治は以後「社会関係の性格そのものにかかわ」り「人間性を再構成し、臣民から市民を、奴隷から自由人を、抑圧された人びとから共和主義者をつくりだす道具となったのである」。(13)

確かにハントにはフュレに影響されている点がある。事実、上のレトリックの矛盾など、フュレが革命の言説のパラドクスと見なしたものに他ならない。しかし、フュレが現実社会から独立な政治の言説の運動を想定して、革命政治の流れを抽象的観念論的に把握するのに対し、ハントはレトリックの運動を、「起源の神話」に陥らぬよう注意しながら、現実社会と関係づけている。事実、彼女にとって「陰謀」という強迫観念は、革命以前の社会に頻発した飢餓や投機の経験、ならびに、その社团的閉鎖的構成からくる社団間の不信感に一因がある。(14)ここには、先にみた彼女の方法論的前提が生きている。また、民主政治を注(13)の引用のように正の遺産とみる点などはフュレと対極的ですからある。

さて、第二章「政治的実践の象徴形式」では、政治がこのような文化的広がりを持って革命期に登場したことによって、政治が日常生活の領域にまで浸透し、民衆の生活に直結するシンボルー花形帽章、自由の帽子、祖国の祭壇、自由の木、自由の女神といった代表的なものから言語、度量衡、貨幣、暦に到るまでーをめぐって展開されることが示される。その展開をハントは、権力の側の教化（透明性の志向）と民衆の側の伝統的なものへの置き換え（伝統的不透明性への回帰）の緊張関係、ならびに、共和国の本来の透明の信念と上からの教化の必要性（現

実の身分・階級・徳の差)との緊張関係という視角から分析する。こうした緊張関係を通じてシンボルとともに革命政治が民衆に深く浸透し、そこから共和主義のフランス的伝統が形成されたわけである。

紙数の都合もあるので、第三章「急進主義の心象表現」、第四章「フランス革命の政治地理学」はとばして、「政治文化」を担う主体について論じた第五章「新しい政治階級」の考察に進もう。ここでは、政治文化と他の社会水準との相互作用が問題となっており、新しい政治文化の創り手兼受け手としての政治階級の内実が「地理的環境、社会的出自、文化的な紐帯と価値」<sup>(15)</sup>との関連で検討される。国家の議員には訓練をつんだ法律家や知的職業人が多いのに対し、都市の議員は商人が多数を占めている。貴族が政治の舞台から消え、今まで政治から排除されてきた集団が替わりに登場するところに、アンシアン・レジームとの明白な断絶がある。重要なことは、高等法院官僚・国王役人→商人・法律家→職人・小売商・教師と、革命の進行につれ階層が下方に移行する形で、政治階級の内実が変化したことである。このように、革命の十年間を通じて政治階級がくりかえし更新されることによって、きわめて多くの人間が政治的経験をつみ、共通の政治文化を培ったのである。

それでは、「世俗主義、合理主義、あらゆる個別独立主義にたいする国民の強調」「民主主義的確信」<sup>(16)</sup>といった共通の文化価値は、いかなる地域構造から生じるのだろうか。これを扱うのが、第六章「アウトサイダー、文化の媒介者、政治的ネットワーク」である。人口の流動性が高まり、新参加者が新たな文化価値の伝達者となる。総じて、利害・職業上、外部の世界とのつながりをもつアウトサイダーが、内部の人間に対する政治文化の媒介者として重要な役割を果たす。その背景には文化・商業・宗教の国民的ネットワークがあるとされる。さらには、地縁血縁関係、フリーメーソンやジャコバン・クラブなどでの組織体験も地域構造として分析されて、政治階級の内実が明るみに出されていく。彼らは、社団的編成から比較的自由であったがゆえに、「民主主義的確信」に親近感を抱き易かったのである。

このハントの研究の意義として、松浦はつぎの四点を挙げている。<sup>(17)</sup> 1) 社会構造からは演繹できない、革命期の政治行動の固有の論理を「政治文化」として概念化したこと。 2) 「新しい政治文化」概念の方法論的多産性。 3) 新しい

政治文化の内容を社会的コンテキストにおいて捉え、新しい政治階級が新しい政治文化との持続的相互作用によって形成されたことを示したこと。この点で、フュレの抽象性もマルクス主義の経済還元主義も免れている。4) 革命の動態論として政治文化のパターンとその変容の理論を提出したこと。このまとめに異論はない。「政治文化」派が今後いかなる業績を上げ、政治史に留まらず、歴史像を豊かにしていくか楽しみである。

さて、思想的にみた場合、ハントはいかなる位置を占めるのであろうか。この著作からは必ずしも明確に彼女の思想性を読みとることはできない。ただし、服装や言葉遣い、人間関係など、生活スタイル全体のトータルな変革として政治を位置づける思想的傾向との親近性は読み取れる。実際、彼女はフランス革命の遺産のうちで、「政治文化」固有の遺産である「民主共和主義」もしくは「民主的・革命的共和主義」<sup>(18)</sup>を重視しているようである。政治的かつ文化的思潮としてみた場合、こうした傾向をラジカリズムと総称しても間違いではあるまい。そのなかには、古くはアナキズム、最近ではエコロジー運動が含まれる。マルクス主義の一部にもそれに同調する傾向がある。前章の注(7)で紹介した後藤など労働者文化を強調する点で、その好例といえる。そうした点からも、ハントのこの著作は興味深い。また、彼女が、フランス的政治文化の伝統とは異なる英米系の自由主義的土壌から、フュレと好対照に、この政治文化の意義を逆照射している点にも注意が必要である。ハントはまた、注でフーコーにも言及しているが、彼との影響関係は定かではない。

#### 注

- (1) フランソワ・フュレ『フランス革命を考える』大津真作訳、岩波書店、一九八九年、十一―十二頁。
- (2) 同上、十二頁。
- (3) 同上、四七頁。なお、別の箇所ではフュレは、革命的危機を一般的に次のように概念化している、「あらかじめ権力が空席になっていること、そして国家も空席になっていること、指導階級の危機、人民大衆の自主的同時並行的動員、マニ教的であると同時に強力な統合力をもつイデオロギーの社

会的作成」(同上、二三五-二三六頁)。

- (4) 同上、七四頁。
- (5) 同上、九五頁。ルソー主義にパラドクスはつきものである。例えば、現実の立法行為は個別の具体的個人によってしかなされないが、理論上、法は、何人によっても代表されえない一般意志の表明でなければならない、したがって、立法を行おうとする者は、原理上不可能なことを行うというパラドクスに直面する。池田成一「歴史哲学-「理性の狡智」を中心として-」二〇〇頁以下(城塚登・濱井修編『ヘーゲル社会思想と現代』東京大学出版会、一九八九年、所収)参照。
- (6) 同上、一一二頁。
- (7) 同上、一一三頁。
- (8) 同上、一一〇頁。強調、原著者。
- (9) 同上、一四二頁。
- (10) A・ソブール『フランス革命と民衆』井上幸治監訳、新評論、一九八三年他の諸著作やG・リュエデ『フランス革命と群衆』前川貞次郎他訳、ミネルヴァ書房、一九六三年などを参照。なお、後述のハントもフュレの解釈では「革命政治はあらゆるコンテクストから切り離されているかのようになって」(前掲書、三三頁)いると、批判を加えている。
- (11) リオタール『ポスト・モダンの条件』小林康夫訳、書肆風の薔薇、一九八六年、参照。なお、フュレは、革命戦線を互いに矛盾し合う要素から成り立つ多種多様な流動的なものと見なしている(フュレ、前掲書、二二五頁、参照)。
- (12) 松浦、前掲論文、二八頁。
- (13) ハント『フランス革命の政治文化』松浦義弘訳、平凡社、一九八九年、七三頁。
- (14) 同上、六四-六五頁、参照。
- (15) 同上、一八七頁。
- (16) 同上、二一六頁。
- (17) 松浦、前掲論文、四八-五〇頁。
- (18) ハント、前掲書、二八〇頁。

フランス革命解釈の鳥瞰図と二つのズームアップ像をみてきたわけであるが、鳥瞰図では種々の制約から思想的構図を骨太に描くことができなかつた。今後研究を進めるにあたって私に必要なのは、コロンブスの冒険を誘い導いたような世界地図である。近世の世界地図製作者の仕事は、ある投影法にしたがって世界を写し出すことだけでなく、探検家たちに目的地を絞らせて探検を方向づけ、かつ、それが成功するという展望を与えて探検を勇気づける役割も果たした。したがって、世界地図は、意図的な歪みと単純化による空白と充満を含んでいた。私が求めるのはそのようなプランとしての骨太な地図である。もちろん、研究活動の結果、プランと発見とのあいだに当然大きなズレが生じるであろうが、このズレこそが研究において実は真に発見されるべきものである。意識的に反証可能な空間を作り出すことで、幻想に陥ることなく、対象の理論的獲得へと進みたいのである。

<マルクス主義> この派のフランス革命解釈は、先の鳥瞰図では主に出来合いのものとして扱った。これは、現代の研究状況における「マルクス主義」派の意図的無視の状態の無意識の反映である。それは、「修正主義」との関係で教条主義的だというわけである。しかし、それを、硬直化し理論的ダイナミズムを喪失したものと見なすのは、一面的である。現在ソ連のペレストロイカをはじめマルクス主義の新たな胎動がみられる。革命史研究においても「革命心性」との関連で新規な接近が試されている。マルクス主義において文化論が理論的空白をなしていたことを考えると、この試みは興味深い。おそらく今後、「政治文化」との連絡網も形成されよう。その解釈上の位置を捉え直すにあたって、「修正主義」との対抗軸よりも、「政治文化」「革命心性」とのつながりによって開けるマルクス主義的フランス革命研究の知の大陸に着目する必要がある。

<修正主義> 政治経済的にはサッチャー主義やレーガノミックス、思想的にはハイエクに代表されるような新自由主義・新保守主義の傾向が強まっていることを考えると、自由競争に基づくエリート支配を弁証し、否定的角度からフラン

ス革命に接近する「修正主義」的解釈は、今後とも一定の支持を得ていくであろう。<sup>(1)</sup>日本にも、園遊会を頂点とする新貴族的なエリート支配の社会結合が作られており、山崎正和や西部邁といった新保守主義的ポストモダンのイデオログもいる。<sup>(2)</sup>しかし、革命を知らずフランス革命すら消費している日本においては、こうした解釈が重要な位置を占める余地はない。逆にいえば、それほど日本の民主主義の伝統は弱い。したがって、「修正主義」が我国で力を得るとすれば、それは、日本にも革命的事態が生じるときである。ちょうどフランス革命がパークの保守主義を生み出したように。また、フェレがフランスのポストモダンの潮流と関連するとすれば、興味深いのは、この潮流からするもっと一貫したフランス革命解釈であろう。それはやはりルソー的な一体化の言説を批判するものになるだろうが、その論じ方は刺激的となろう。例えば、「政治が十九世紀から現に存在しているのは、フランス革命があったから」<sup>(3)</sup>とし、「のちに自明で普遍的で必然的なものとして機能することになるものを、ある時点で形成したいろいろな合流、衝突、援護、封鎖、力のゲーム、戦略などを、再発見すること」<sup>(4)</sup>を課題とするフーコーだったら、フランス革命をどう扱うであろうか。彼ならきっと、「政治文化」派と同じ対象を扱ってしのぎを削り合ったに違いない。こうした未知の大陸の可能性に注意したい。

<政治文化> これは、新たに発見された科学的対象であると同時に、ある種の思想的傾向を内包してもいる。フランス革命の政治文化に対し、テルールを生む論理を有する点で留保を付けながらも、ハントは、そこにアングロ＝サクソンの伝統にはない価値を認めている。また、転換を嫌う「修正主義」とは異なり、伝統との断絶、まったく新しい生活スタイルの始まりにも、ハントは好意的である。それゆえ、「政治文化」派の旗揚げによって今後問題になるのは、「修正主義」派との解釈上の対立である。しかも、それは、新自由主義かケインズ主義か、競争社会か福祉社会かが現在英米で争われているだけに、なおさら重要である。また、ラジカリズムの思想的弱点ともつながるが、経済など実定的なものの軽視が、解釈上の問題点として今後指摘されることになろう。そこにマルクス主義が食い込むことになるかも知れない。

<革命心性> ハントとヴォヴェルとは近接している。「政治文化」と「革命心性」とは総合されうるカテゴリーであろう。しかし、心性史をはじめアナール

派の業績に疎い筆者は、この点について無責任な評価は避けねばならない。いずれにせよ、この二つの陸地の続き工合をこれから注意深く測量していきたい、マルクス主義との接続にも留意しながらであるが。

以上が、私の研究を方向付ける総論的な思想見取図である。諸派が競合して扱うことになる対象としては、第一に、文化が挙がる。もちろん、この文化は、文明と対置させられたドイツ的な精神文化といったものではない。問題なのは、「政治文化」や、ブルデューが『ディスタンクシオン』（既訳は二分冊の前半のみ、石井洋二郎訳、新評論、一九八九年）で、「ハビトゥス」－個人の所属する階級や集団に特有の知覚・評価・行動様式の体系－にしたがって行動する個人が、身体的・客体的・制度的文化事象と結ぶ関係であり、それを通じて価値上の区別だけが構造化されていくものとして分析した文化である。しかも、革命史研究では、その動的変化が対象となろう。第二に、遅塚が強調する比較史からみたフランス革命の近代的意味が問題となろう。折にふれて述べてきたような現代日本の政治文化状況との対照、あるいは、中国のそれとの対照……こうしたことを通じて西洋中心主義的にならずに、革命のフランス的、西洋的、世界史の意味を捉え、逆に、そこから個々の社会を問い直すことが、重要となると思われる。

以上で、プランは出来上がった。後は、これにしたがって研究という遠大な冒険に出かけることだけが問題である。目前に迫った七月十四日に、二百年前のパリで、バスチーユ陥落という大冒険を行った人々を心の友としながら。

一九八九年七月一日脱稿

## 注

- (1) ハイエクならびに後述のフーコーについては、池田論文を参照のこと。
- (2) 西部邁については、やはり本報告集所載の早坂論文を参照のこと。
- (3) 『ミシェル・フーコー 1926-1984 権力・知・歴史』福井憲彦・桑田禮彰・山本哲士編、新評論、一九八四年、六六頁。
- (4) 同上、一四七頁。